St. Luke's International University Repository

A Report on Adult Nursing Practice（Chronic Illness and Conditions） That Combines Online and On-Campus Training Amid the Coronavirus Disaster

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 文奈, 八巻, 真紀子, 高橋, 奈津子, 林, 直子, Matsumoto, Ayana, Yamaki, Makiko, Takahashi, Natsuko, Hayashi, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016584

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

コロナ禍におけるオンラインと学内演習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）の実践報告

松本　文奈[1)]　八巻真紀子[2)]　高橋奈津子[1)]　林　直子[1)]

A Report on Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) That Combines Online and On-Campus Training Amid the Coronavirus Disaster

Ayana MATSUMOTO[1)]　Makiko YAMAKI[2)]　Natsuko TAKAHASHI[1)]　Naoko HAYASHI[1)]

〔Abstract〕

Herein we describe an outline of the adult nursing practice that was conducted by combining online and on-campus training amid the coronavirus disaster, as well as lessons learned by the students. The training was reorganized into 5 days of online ward practice, 2 days of online outpatient practice, 1 day of on-campus practice, 1 day of online cancer nursing practice, and 1 day of review. In actual nursing training, the students took charge of actual patients. After taking charge of a patient in the ward practice, the students met the same patient again after several years in the outpatient department, taking charge of him/her in outpatient practice as well. By learning in the setting of meeting actual patients again after a long time, the students were able to learn the nursing process in a situation where they could empathize with the recuperation life and fluctuating feelings peculiar to patients with chronic diseases. The teaching staff organized the practical training in various ways, and the students were as committed to the training and as determined to learn as the students in previous years.

〔Key words〕 Online practice, Remote practice, Practice with simulated patients,
Adult nursing (chronic illness and conditions),
Adult nursing practice (chronic illness and conditions)

〔要 旨〕

本稿は，コロナ禍において，オンラインと学内演習を組み合わせて実施した成人看護学実習（慢性期）の実践概要と学生が得た学びの報告を目的とする。従来は，病棟実習５日，外来実習５日で実施していた実習を，オンライン病棟実習５日，オンライン外来実習２日，学内演習１日，オンラインがん看護実習１日，学習のまとめ１日に再編した。看護展開は，事例患者を担当し学習した。学生は病棟実習で１人の成人を担当したのち，外来で数年経った同一成人に再会し，外来実習でも担当するという設定とした。学生は事例患者だからこそ設定できた状況下で，長い経過を辿る慢性疾患患者特有の療養生活や，ゆらぐ気持ちに共感しながら，看護過程を学習できていた。また，オンラインで実施した教員との模擬患者演習は，学生の実践場面を録画することで学生が自身の実践を振り返る貴重な教材となり，今後の演習や実習に活用し得る教育方法を見出すことができた。教員は様々な手立てで本実習を構成したが，学生の実習へのコミットメントと学びを志向する逞しさは例年に劣らないものがあり，実習目標の円滑な達成につながったと考えられた。

１）聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
２）聖路加国際大学大学院看護学研究科（博士課程）・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Doctor's Program

受付　2021年10月20日　　受理　2021年11月16日

〔キーワーズ〕 慢性期看護，慢性期看護学実習，オンライン実習，遠隔実習，模擬患者演習

Ⅰ．はじめに

2020年度は，新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大に伴い，講義，演習，実習の教授形態が一変した。聖路加国際大学においても，例年９月～翌年１月に渡り実施される学部３年生の臨地実習（レベルⅡ）は，遠隔実習を主とした実習形態への変更を余儀なくされた。

看護基礎教育課程において臨地実習は，それまでに習得した知識・技術を看護実践の場面に活用し，看護の理論と実践を結びつけて理解する能力を養う重要な学習[1)]として位置付けられている。こうした状況下でも効果的な実習教育を実現するために，実習計画再編，代替実習の対応に追われながら実習指導に取組む１年となったが，学生の学びは一定の成果を得るに至ったと感じている。

本稿では，コロナ禍において開講した，オンラインと学内演習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）（以下，本実習）の概要と，学生が得た学びの傾向について報告する。

Ⅱ．オンラインと学内演習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）の開発と実習概要

１．実習構成とコンテンツの検討

１）事例患者の考案

本実習は２週間２単位で実施されている。これまで，慢性疾患患者を支える看護を学ぶために，療養支援の場として特徴的な病棟部門と外来部門，双方で患者を受け持ち，看護活動（看護問題の抽出，立案，評価）を学習していた。オンライン実習中心の実習構成においても，実習目標を達成するためには，病棟看護と外来看護の特徴を学習することは必要と考えられ，これについては変更しないこととなった。一方で，２名の異なる事例患者を週替わりで提示することは，学生の思考に混乱を招くのではないかという懸念もあった。慢性疾患患者は，長期的な経過をたどるため，把握すべき情報は多く，例年の臨地実習でも，情報整理に苦慮する学生が多い。これらを解決するため，１名の対象患者が辿る慢性長期的な療養過程をベースに事例を提示することとした。

学生は病棟実習でＡさんを担当したのち，外来で数年（事例により異なる）経ったＡさんに再会し，外来実習でも担当する設定とした。時を超えて再会する事例患者であるため可能となる設定で学習することで，慢性疾患における安定期や急性増悪期の様子，療養に向かう心情や価値観は一定ではないこと，社会的役割は変化していくといった，長い経過を辿る慢性疾患患者特有の療養生活や，ゆらぐ気持ちに共感しながら看護過程を学習することができることを目指した。

２）看護技術等の看護実践力養成の代替

大学の教室は他領域の臨地代替演習と調整しながら確保するという現状もあった。現状から可能な方法として，実習中盤に，事例患者への看護実践を想定した学内演習日を１日設けることとした（図１）。演習内容は，例年であれば臨地実習で経験できていた自己血糖測定，口腔内吸引，事例患者が受けている医療的ケアからフットケアチェック（糖尿病性足病変のチェックとして）と足浴，腹囲測定のロールプレイ学習，インスリン自己注射練習具を用いた自己注射体験，とした。

なお，学内集合は，大学既定の健康観察により問題ない学生のみとし，大学の感染予防対策に沿った手順で実施した。少しでも体調に懸念がある学生は，自宅で動画学習しながらの Web 会議システムからの参加とし，演習風景を共有しながら取り組んでもらう。臨地実習で学べる看護技術を完全に代替することは困難であったが，看護技術学習として準備物品や手順をクイズ方式で学習できる動画教材も準備し，事例学習の中で実践している場面を想像して自己学習するように提示した。

３）がん看護学習方法の検討

例年は病棟担当患者や，国立がんセンター中央病院通院治療センター部門，聖路加国際病院オンコロジーセンター，放射線腫瘍科での外来実習を通じ，がん看護を学ぶ機会があった。がんは慢性不可逆的な病いとして慢性疾患に区分されており，本実習においても重要なコンテンツと考えられた。

今回は事例患者としてではなく，学生個々の関心に合わせたがん種，病期による様々な療養の様子を学ぶ動画学習の機会を設け，学生同士がカンファレンスでがん看護を様々な視点から考察し，学ぶ方法をとることとした。

図１　ハイブリッド学内演習の様子（写真）

4）動画教材等の準備

準備を進める中で，臨地代替として効果的なツールとしていくつかの動画教材の必要性が生じた。事例学習に取り組むうえでも，多くの書籍や資料が必要だが，コロナ禍にあって図書館や書店へ出向くことが叶わない学生も多いため，学内の教育予算で可能な範囲で動画教材を購入（一部他領域との共同購入）した。なお，臨床での情報収集をトレーニングする目的で教育用電子カルテの導入も検討したが，事例患者を理解するための各学習コンテンツに集中してもらうため導入は見送った。

2．実習スケジュールと実習方法

1）実習スケジュール

実習スケジュールの構成，進め方，ワークの概要を**表1**に示す。時間のメリハリをつけるため，毎日8:30（本校講義1限開始時間を設定）にオンライン全員集合とした。教員は当日の実習予定を改めて説明し，学生は順に当日の実習目標の発表を行う会とした。その後担当教員のもとグループにわかれ，実習開始とした。

午後は，14時にWeb会議システムに再度全員アクセスして，グループワークの進捗を全体で共有し，翌日の実習に向けた事前学習や提出課題の確認を行う時間を設けることとした。この会では双方向的に話すことも意識し，困っていることなどの共有など行い，学生個人が孤独感なく取り組めるような雰囲気づくりも心掛けることとした。

2）共同学習を基盤としたオンライン実習

Web会議システムは，大学でアカデミック契約のあるZoomを使用した。1クールあたりの学生数は14～15名である。学生を4グループに分け，meeting roomでグループワークを行い各課題学習に取り組む方法をとった。学生との連絡や提出物は，本学が導入しているクラウド型教育支援サービス《manaba》を使用することとした。

複数の臨床指導者と討議する学習機会が持てない中で，自らの考えを説明する体験を積み重ねるために，共同学習[2)]においてグループメンバーと討議するワークを多く設定した。本実習の具体的目標には「……を説明できる」が複数設定されている。自身の捉えた患者の全体像や，目指すQOLや維持向上のための方策，必要となる多職種連携など，根拠に基づき自らの考えを説明し意見を述べることを意識してもらうこととした。

3．事例患者への看護展開

1）病棟実習の進め方

学生は資料から得た患者情報を整理し，病棟実習3日目までにAさんのSequence Of Events;SOEと看護問題を抽出（まだ看護計画は立案しない）する。個人学習で作成した内容がベースとなるが，学生はグループメンバーで討議し，グループで1つの成果物を作り上げてもらう。教員は学生に，臨床ではこのように患者をチームで分析し看護の方針を決定する過程があることを適宜伝え，チームナーシングに貢献できる役割を見出したり，敬意を持って自分と異なる視点を学び合えるような討議となるよう気を配ることとした。

病棟実習4日目は，「看護問題全体発表会」を行う。グループで作成したSOEと看護計画をzoomで画面共有しながら，Aさんの看護問題とその抽出過程を，グループごとに発表する。看護問題の抽出根拠や優先度に関してグループ間で意見交換を行う場とする。

病棟実習5日目は教員が患者役となり，模擬患者演習を行う。「看護問題全体発表会」の後，グループで看護問題を見直し看護計画を作成しているので，学生は立案したプランのいづれかを模擬患者に実践する。学生は1人1回の実践となるが，グループで立案したプランの実践であるため，メンバーが実践した内容は自分が実践したものとして，全ての看護実践を振り返り，評価する。

2）外来実習の進め方

学生は，外来実習のため訪れた外来部署で，数年ぶりに外来受診したAさんに再会し，その日担当する設定である。通院治療しながら療養を続けてきたAさんの現在の顕在的（潜在的）看護問題を，病棟実習同様，グループで討議し抽出する。再会までに流れた歳月，Aさんはどのような療養生活を送っていたのか想起しながら慢性疾患患者の療養の特徴を理解し，病状の進行，療養環境の変化がある場合，外来で焦点を当てる看護問題はどのようなものとなるのか等，グループで討議する。

外来実習では，グループが作成した看護問題と抽出理由を資料化し，manabaにて学生が相互閲覧し，互いにフィードバックしあうこととした。

4．各学習素材資料の考案と準備

各学習のために9つの「学習素材資料」を作成した。特に，臨床実習のように患者の日々の変化を感じられる工夫として，毎朝配信する経過記録資料「資料3：朝までの経過記録」を準備した。また，看護師との会話や指導を受ける場面がイメージできる資料として「資料4：受け持ち3日目病棟にて」（**図2**）「資料8：通院治療のための外来受診日の様子」（**図3**）を準備した。

Ⅲ．学生が得た学び　～学生アンケートより～

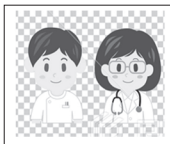
1．慢性疾患患者の特徴，身体・心理社会的健康課題，看護活動に関する学び

アンケートから「前期の講義で知った様々な理論を，事例を通じて具体的に考えることが出来た」「患者のS情報は個別性を捉えるために重要とわかった」「患者は日常

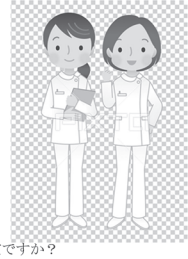
表１　2020年度　成人看護学実習（慢性期）　実習スケジュール

◆ワーク１～９◆はグループで行います。提出課題は，翌日8:30までに manaba へ提出

実習		学習素材資料	午前ワーク	午後ワーク
1	病棟1日目	（資料１）「担当事例患者」 （資料２）「学習参考動画リスト一覧」	◆ワーク１◆全体像を捉える ・事例読み合わせ ・担当患者の情報整理，病態学習等から全体像を捉える ＊提出課題「患者プロフィール」	【個人学習】 ・患者理解，治療計画のために必要となる教科書，参考資料を復習する ・関心を持った動画を選び，視聴学習
2	病棟2日目	（資料３）「朝までの経過記録」	◆ワーク２◆情報収集準備＆ SOE 作成 ・「朝までの経過記録」にて患者の最新の状態把握 ・ワーク１を基に，身体，心理社会面の健康課題を検討し，SOE 作成 ＊提出課題「SOE」	【個人学習】 ・患者理解，治療計画のために必要となる教科書，参考資料を復習する ・関心を持った動画を選び，視聴学習
3	病棟3日目	（資料３）「朝までの経過記録」 （資料４）「受け持ち３日目病棟にて」 ・資料を通じて担当看護師からの指導場面を学ぶ	◆ワーク３◆担当３日目看護計問題 ・看護問題を抽出。 ・上位３つの看護問題について，抽出した根拠，アセスメントをまとめる ＊提出課題「看護問題とその抽出理由」	【個人学習】 ・患者理解，治療計画のために必要となる教科書，参考資料を復習する ・関心を持った動画を選び，視聴学習
4	病棟4日目	（資料３）「朝までの経過記録」 学生：発表用資料アップ 「グループの SOE」と「グループの看護問題」を8：30までに manaba プロジェクトに提出	◆ワーク４◆看護問題 全体発表会 ・グループごとに SOE を示しながら看護問題とその抽出根拠と優先度の考え方，看護の方針を表明する ①10分×４グループ＝40分 ②全体で質疑応答，意見交換＝30分 ③教員より ・活発な討議を行い，他グループから新たな視点を得る。	◆ワーク５◆看護計画立案 ・発表会での学びを振り返り，＃１～３の「看護問題」「看護目標」「看護活動」を作成。 ・看護問題，優先順位など，柔軟に変更してよい ＊提出課題「＃１，２，３看護計画」
5	病棟5日目	（資料３）「朝までの経過記録」 （資料６）模擬患者への看護実践の進め方 ・タイムスケジュール ・ロールプレイングについて	◆ワーク６◆模擬患者への看護実践 ・学生が順番に，模擬患者（教員）へ，立案したプランを，１人５～10分以内で実践 ・自身の看護プランの実践にあたっては，看護目標に沿った問いかけ，情報収集，説明，教育的支援が求められる。各自準備して臨むこと ・見学しているメンバーは，看護の効果やプランの修正などフィードバックする	【個人学習】 ・録画した自身の看護実践動画を視聴，看護実践を振り返る。＃１～３の「看護の評価」を行い，看護計画を適宜修正，加筆する ・「病棟実習を通しての学び発表」 ①２分×14（15）人≒30分 ②全体で意見交換＝10分
6		（土）		
7		（日）		
8	演習	（資料６）「演習のしおり」	・インスリン自己注射体験，血糖測定，口腔内・気管吸引，腹囲測定，足浴，フットチェック	【個人学習】 ・動画学習等で看護技術復習
9	外来1日目	（資料７）「担当事例患者」 ・明日，外来治療のため来院する設定の患者を担当する ・病棟で担当した患者に数年後に再会し担当となる	◆ワーク７◆外来医療・外来看護の特徴を捉える ・事例読み合わせ，療養生活の様子，全体像を捉える ・外来治療および看護の学習 「担当患者の通院外来」，「オンコロジーセンター」の特徴を学習 ＊提出課題「外来部門の特徴と看護」	【個人学習】 ・患者理解，治療計画のために必要となる教科書，参考資料を復習する ・関心を持った動画を選び，視聴学習
10	外来2日目	（資料８）「通院治療のための外来受診日のようす」 ・資料を通じて担当看護師からの指導場面を学ぶ	◆ワーク８◆外来における看護問題を捉える ・資料を基に，グループで看護問題を抽出する ・上位２つの看護問題看をリストする。また，抽出した根拠，アセスメントを論述し記録にまとめる（様式５） ・グループ代表者は，12時までに manaba「プロジェクト」に様式５をアップする。	◆ワーク８の相互閲覧◆ ・様式５を相互閲覧し，互いの視点を学びあい，意見・感想をコメントする ・「外来実習を通しての学び発表」 ①２分×14（15）人≒30分 ②全体で意見交換＝10分
11	がん看護	（資料９）「健康と病の語り（がん疾患）」「がん学習動画リスト一覧」	【個人学習】「がん患者療養支援」 ・関心を持った動画を選び，視聴学習 ・通院治療しながらがんとともに生きる人々のありようを学習する。がん看護およびがん通院治療の現状を学ぶ	◆ワーク９◆がん患者療養支援カンファレンス テーマ「病期や治療，社会背景の異なるがん患者の語りを視聴し，おのおのの患者に対して，どのようなことに配慮することがあると考えたか」
12	最終日		◆最終カンファレンス◆ テーマ：病棟の学びと外来の学びを統合し，「慢性・不可逆的な健康課題を持つ患者と家族が，病いとともに生きていくための生活の調整・再構築を支援する看護において重要と考えたこと」	個人面談



学生；おはようございます、盛岡さんを担当させていただいています、看護学生の（　　**※自己紹介します**　　）です。本日の実習では、盛岡さんのお部屋に訪室して、お話しながら、（　**※今日の目標を伝えてみましょう！**　）に関する情報を収集したいと思っています。よろしくお願いします。



NS：おはようございます、盛岡さんのこれまでの経過、把握できましたか？長く療養されてきたので、病態が複雑に感じるかもしれませんね。これまでの経過を捉えつつ、今日は、
「今回の入院目的は？」、
「今、抱えている健康課題は？」
「退院してから、盛岡さんが困らないために整えておかなくてはならないことは？」
を、考えて、今の看護問題を考えていきましょう！
NS：今日は。バイタルサイン測定やシャント音の確認もする予定ですか？

学生：バイタルサインは基礎看護展開論実習でもさせていただいていたので、1人でさせていただければと思います。シャント音・・シャントについて、学習はしてきたのですが、どのように音を聴取すればいいのか、確認してきませんでした。

NS：盛岡さんは昨日シャントを造設したけど、退院までに、自分でシャントの管理をできるようになってほしいのよ。盛岡さんには、シャント管理の教育的支援も行っていく予定なの。退院後、血液透析という治療法を、どのように生活に組み込んでいくか、一緒に考えていかなくてはね。そのための情報収集ということを意識して、今日は実習を進めていきましょうね。
学生：盛岡さんは多くの薬を内服していらっしゃいますし、特にインスリンの自己注射は、どのように自己管理できているのか、確認したいです。シャント音をどのように確認するかも見せていただきたいので、よろしければ、NSさんがチェックする時、一緒に入らせていただきたいです。

NS：そうですね、では、盛岡さんのファーストラウンドは、一緒に入りましょう。シャント造設した患者さんへの血圧測定の注意点は、学習できてますか？

学生：はい、盛岡さんは左前腕にシャントを造設しているので、（　　**※答えてみよう！**　　）で測定します。あ、本日、シャント訓練など、何か行われる予定があるのでしょうか。もしあるようでしたら、見学に入らせていただきたいのですが・・。

図２　資料４：受け持ち３日目病棟にて（一部抜粋）

NS：おはようございます、盛岡さんのこれまでの経過、把握できましたか？長く療養されていて、多くの合併症も生じていますし、病態が複雑に感じるかもしれませんね。
学生：実は２年前のシャント造設入院の時、病棟実習で盛岡さんを担当させていただいたんです。その時、盛岡さんに生じている病態や療養環境を、一度整理しています。
NS：そうなの！その知識は活用できるわね。では、盛岡さんの今の療養生活が続くと、予測される健康課題があるか、考えてみましょう。または、今、盛岡さんが抱えている苦痛や困難感など、今対応が必要な健康課題があるか、考えてみましょう。

学生：あの・・・。外来で看護問題を立てるって、イメージがつかないのですが・・。
NS：外来通院している患者さんは、みな、何かしらの治療を受けているでしょう？その治療を、患者さんが円滑に受けられるための療養支援を、看護師は外来で行っています。具体的には、治療により生じる不快な症状や苦痛、副作用などを、いかに生活の中で対処してくかを一緒に考えていくのね。もちろん、治療を継続できるように本人の心理的サポートをしたり、生活環境、職場環境をどう整えていくかも考えて、対処法を考えます。そうして患者さんが、治療を続けながらも、病とともにその人らしい生活を再構築していくための支援を行っているの。その看護活動は、看護過程に基づいて展開されるので、当然、外来でも看護問題に基づいて、患者さんに看護介入していくのよ。
学生：じゃあ、ここ最近の盛岡さんの療養生活を知って、今後この療養生活が続くと、進行していきそうな病態を、今日の看護問題として立案してみればいいですか？

NS：いいと思います。もちろん、身体的な病態の悪化も注目すべきですが、心理面や、社会的役割に注目することも大事です。透析治療は、終わりがない治療ですよね？透析を受けることを止めることは、すなわち生命の危機を意味します。そうした苦悩を抱えていること、それでも社会的役割を果たしていけるような生を支えることも、通院治療を受けている患者さんには必要な看護になります。
学生：大変ですね・・・
NS：看護師だけが担っているわけじゃないのよ。多職種でチームとなって、対応しているのよ。その中で、看護の専門性も考えてみましょうね。

学生：いっぱいあるような気がしてきました・・
NS：慢性疾患を抱えている患者さんは、多くの健康課題がありますよね。だからこそ、「今」に注目して、今日はまず、上位２つの看護問題を考えてみましょう。

図３　資料８：通院治療のための外来受診日の様子（一部抜粋）

生活の一環の中に慢性疾患があり，それと向き合いながら普通の生活をしていることを学んだ」といった感想が多く聞かれ，例年同様，慢性疾患患者の特徴や，病態理解に学びが得られていたことが把握できた。

これは事例患者を１名として病棟と外来双方から看護支援を考える設定や，動画教材の活用が有効であったと考える。また，各カンファレンスでの討議を通して得た学びと思われる感想も多く，「慢性期でも医療的ケアが最優先だったり，それより心理社会的なことが優先となる場合もあったり，優先度を考える重要性を実感した」「看護師が身を置く場所が異なれば必要とされる役割も変化することがわかった」など，慢性疾患の維持期，急性増悪期に応じた看護問題の優先度の考え方，療養支援の場に応じた看護の特徴も習得できていた。

２．看護実践力に関する学び

「模擬患者演習での実践を通して，看護計画を立案するだけでなく，どんな反応が返ってくるのかが学べ，本当に患者と接しているような気持ちで看護実践することができた」「学内演習で実際に血糖測定やインスリンの自己注射など手技を実践してみることで対象者理解が深まった」「動画視聴では，看護師の手技，コミュニケーションスキルを用いた患者との関わり方，多岐にわたる慢性長期的な疾患を有する患者への支援を学ぶことができてとても良かった」などの意見が多く聞かれた。

臨地実習での経験には及ばないものの，臨地実習の代替として模擬患者演習や学内演習，動画学習は有用であることがわかった。模擬患者演習については，学生の希望に応じて録画し復習教材として活用したところ，「録画を見返し，客観的に自分がどのような癖があるのか課題を把握することができた」「他学生のロールプレイをから，自分には無いコミュニケーション技術や言葉選びなどを学べた」等，学生からは好評であり，実習前の教育法としての運用可能性も感じられた。

３．根拠に基づいて自らの看護を考え表明する力と医療チームの一員としての自覚

「これまで，ふわっとした意見で話すことが多かったが，根拠を持って意見を述べることができるようになった」など，グループワークで看護活動を討議することを通じて，根拠に基づいて自らの看護を考え表明する力がついたという学生が多かった。グループワークの活用は，「……を説明できる」という実習目標達成に向けた方法として，成果のある方法であったと考える。

また，「オンラインでの話し合いは，最初難しさもあったが，自分の考えを述べる重要性を意識する機会となった」「チームがうまく機能するために自分に何が出来るの

かを考える意識が育まれた」等，医療チームの一員としての自覚が育まれた体験を述べる学生も多く，学生はこうした学びも得ていた。

4．動画学習から得た多種多様な患者への療養支援，患者理解に関する学び

通常の実習では担当患者への看護が中心となるため，複数の患者の闘病を学ぶ機会は少ない。今回，動画学習により多種多様な患者の療養の様子や看護技術を学習する教材を準備し，動画学習時間を設けたことは，多様な支援や患者の個別性を学ぶ機会となっていた。

「実際の経験談をいくつか聴き，患者がどのように感じ，受け止めているのか，どのような支援を求めているのかを理解できた。」「多くの方の療養生活を学べてとても勉強になった」「いろんな人の意見に触れながら自分の看護観を構築できた」等，動画による多くの患者との出会いは学生にとって大きな学びとなっていた。

5．柔軟な思考と自律性

「将来コロナ世代と言われてしまうんだと不貞腐れていた部分があったが，オンラインでじっくり思考を深めるということは臨地実習ではかなわなかったことだと思い，この経験を将来の自分につなげたいと思うことができた」「自宅だと疑問点を調べたいときに調べられたので，病態や看護実践の根拠に対する知識学習に充分取り組め，理解が深まった」「実践以外の部分に特化した学びは出来たと思える実習になった」など，突然の実習形態の変更に戸惑いながらも，目の前に提示された課題に真摯に取り組み学びに転換していく柔軟な思考，自律性が備わっていったことも，実習を通して学生が得た学びであったのではないかと考える。

「家で１人という環境で学ぶことは少し不安でした。しかし自立することも学べました」「多少，朝起きるのが辛かったが実習が楽しく，今日は何を学べるかなどポジティブに実習に取り組むことができた」等，真摯に朗らかに実習に向かう発言も多かった。

Ⅳ．今後の演習・実習への活用

次年度の学部３年生の本実習は，新カリキュラムで展開する。実習の流れを再編するタイミングともなる中，以下の示唆を活用し準備を整えていきたい。

①１名の患者が辿る慢性長期的な療養過程をベースとした事例学習は，病期に合わせた療養支援や様々な療養支援の場からの看護を考えるうえで理解しやすい素材であった。そのうえで実践される模擬患者演習（録画）は，患者への直接的介入に至る前に，学生自身が活用できる有用な教育素材となり得ることがわかった。実習前学習の一環として積極的にとり入れていきたい（図４）。

図４　模擬患者演習　パンフレットを用いた教育的支援実践の様子（写真）

②動画学習を通じた多種多様な教材準備は，コロナ禍において大学に特別予算枠があって実現したことも大きい。効果的な動画素材を精選し，計画的購入や Web 無料素材を組み合わせるなどの工夫を進めたい。

③今年度の実習において，従来の実習よりも特徴的に学生が得ていた学びとして，根拠に基づいて説明したり看護を表明する力，医療チームの一員としての自覚，柔軟な思考や自律性があった。これらの学びを促した要因について更に振り返り，次年度の実習に取り入れていきたい。

Ⅴ．まとめ

コロナ禍において開講した，オンラインと学内演習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）の実践報告を行った。学生の学びは一定の成果を得るに至り，次年度に繋がる学習素材についての示唆を得た。

引用文献

１）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会．看護学教育モデル・コア・カリキュラム：「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標（平成29年10月）[Internet]. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf［参照 2021-10-01］

２）溝上慎一．アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換．東京：東信堂；2014.